

J R常磐線沿いの市営駐車場隅にある川口川開門遺構（鉄扉と揚水ポンプ）



霞ヶ浦側から見た川口川開門(1907年)
開かれている鉄扉が遺構となっている

土浦の洪水1～水害常襲地～（霞ヶ浦その28）

桜川河口の湿地帯に形成された土浦は、戦前までは水郷・水の街でした。至る所に川や堀が流れ、小舟に乗れば、街の中を隅から隅までぐるっと一周できました。しかし、雨が降ると霞ヶ浦の水が上がってきて洪水になるので、「蛙がしょんべんしても洪水が出る」とまで言われました。今号からは、土浦の洪水について記していきます。敬称略。【 】内は筆者による注記です。

土浦の立地条件

土浦の市街地は、霞ヶ浦の北西端に流入する桜川河口部低地に立地しています。低地の幅はほぼ2.5kmで、南と北には比高(近接した2地点間の高度差)20～25mの崖が連なる、筑波稲敷台地と新治台地とが、それぞれ広がっています。市街地部低地の標高は、1.5～2.5mと低く、霞ヶ浦の平均水位0.25mとの差は僅かです。中央には、比高1mほどの土浦砂堆が、低地を閉ざすように南北に伸びています。1905(明治38)年の地形図には、桜川から分流する多数の水路が、低地内に記されており、市街地が三角州地形であることがよく分かります。かつては、水路に舟が行き交い、岸辺には柳が茂るという水郷の景観を見ることができました。

土浦城(亀城)

土浦城(跡地が亀城公園)は、室町時代の永享年間(1429～1441年)に、若泉(今泉)三郎によって築かれたと言われています。その後、戦国時代の1516(永正13)年、若泉五郎左衛門が城主の時、小田氏の部将菅谷勝貞が城を奪い、以後、菅谷氏が勝貞、政貞、範政の3代にわたって土浦城を守ってきました。しかし、主君小田氏が滅亡し、1590(天正18)年、関東の新領主として徳川家康が江戸に入ると、家康は、次男で結城氏に養子入りした結城秀康に土浦を与え、土浦城は結城領内の支城となりました。その秀康が、越前国北ノ庄(福井藩。秀康は結城姓を松平に復し、越前松平家を興す。)に移ると、松平信一が3万5千石で入封しました。1617(元和3)年、2代目の松平信吉が上野国高崎に転封になると、西尾忠永が2万石で入封します。以後、城主は西尾氏・朽木氏と代わり、さらに1669(寛文9)年には、土屋数直が4万5千石で入封。1682(天和2)年、子の政直の代に駿河国田中(現静岡県藤枝市)に移りましたが、代わって城主となった松平信興が、5年後の1687(貞享4)年に大坂城代に転ずると、土屋政直が再び6万5千石で入封しました。その後、3度の加増を受けて9万5千石となり、常陸国では水戸藩に次いで大きな領地

を支配し、以後、土屋氏が11代・約200年間に及ぶ世襲を繰り返して、明治維新に至りました。土浦城は、低湿地に水壕を幾重にも繞(めぐ)らして防衛施設とする平城で、山城が殆どであった室町時代には珍しい城でした。三角州面上を流れる多数の水路を周りに配置し、そこから濠に水を引き入れていきます。城は比高1mほどの土浦砂堆の内陸側に置かれていますが、これは霞ヶ浦からの逆水を防ぐ対策でもありました(一方で、これは内水の湛水を助長した)。水戸街道(陸前浜街道)は、敵の侵入を防ぐために柵形に屈曲しながら砂堆上を通っており、古い町並みは、この水戸街道沿いに並び、低地をほぼ横断しています。城の築造が始まった永享年間には、桜川は城のすぐ北側を流れており(明治16年の地形図には、その旧流路が見られる。)、城下は水害に悩まされてきました。そこで、1459(長祿3)年から1461(寛正2)年にかけて、桜川の河道を大曲から現河道に付け替え、その氾濫の影響を和らげる対策を採ったと言われています。

城下町土浦



明治初期の土浦(旧職員・飯村弘(高5回)作成)

1603(慶長8)年、江戸幕府を開いた徳川家康は、奥州諸大名への備えとして、水戸に五男の松平信吉(土浦藩主であった松平信吉と区別するため、武田信吉と呼ばれる。)を、次いで十男の徳川頼宣(後の紀州徳川家祖)を、さらに十一男の徳川頼房(水戸徳川家祖。頼房の三男が光圀)を置きました。そのため、江戸と水戸とを結ぶ道路の整備に力を注ぎ、1604(慶長9)年、水戸街道の建設を幕府直轄で進めました。土浦藩主であった松平信吉は、これを城下に通し、沿道に町屋を設け、旧町名の田宿・中城・本町・仲町・田町・横町が造られました。さらに1613(慶長18)年には、桜川に銭亀橋、南門外の堀に箕子(すのこ)橋、旧桜川に桜川橋(桜橋)のいわゆる「三橋」が、幕府の直轄工事で架設され、名実ともに城下町土浦が誕生したのです。この水戸街道の開通によって、土浦は、水戸街道と霞ヶ浦の水陸交通の要衝となり、本陣・旅籠・問屋が置かれ、多くの商家が軒を連ねるとともに醤油醸造業が盛んとなり、常陸国では水戸に次ぐ第2の都市として繁栄しました。明治時代初期には、新治県の県庁が置かれ、新治県が茨城県に統合された後では、新治郡の郡役所が置かれました(土浦中学は開校当初、校舎が建設されておらず、この役所の2階等を借りて授業を行っていた。)。1896(明治29)年に、日本鉄道が土浦と友部間(現JR常磐線)を、翌1897年には土浦と田端間(現JR常磐線)を開通させ、それまでの内陸水運に代わる主要な交通手段となりました。土浦の洪水 土浦の市街地は、前述したように、筑波稲敷台地・新治台地に挟まれた桜川低地の、霞ヶ浦へと流れ込む桜川河口付近に立地しています。そのため、たびたび洪水に見舞われてきました。この土浦の洪水について、高7回・岩崎宏之(筑波大学名誉教授・元土浦市立博物館長)は、『土浦の洪水記録』一先人が語る水とのたたかい』巻頭の解

題で、

「近世から近代にかけての土浦は、たびたび水害に見舞われた。水害が起きる頻度は他の土地と比べて圧倒的に高かった。大きな洪水が数年毎にあり、ちよつとした大雨が降ると大水になったが、それには土浦の地理的条件が大きく影響していた。(略)

しかしこのような低地に位置する土浦の水害は『有史以来』のものではなかったと思われる。土浦に洪水が頻繁に起きるようになったのは、江戸時代も十七世紀末に近い頃からのようである。(略)

土浦に洪水をもたらした原因として、桜川の氾濫と霞ヶ浦の逆水がある。逆水とは利根川の洪水が霞ヶ浦に流れ込み、その水が逆流して水害をもたらすことである。逆水になると、土浦の中心市街地が低地なので容易に水が引かず、浸水が長期にわたり、大きな被害となる。例えば昭和十三年(一九三八)の洪水は、これらの原因が複合して大水害となったのであるが、江戸時代以来の洪水の歴史を見ると、その出水の様相はさまざまのものであった。(略)

坂東太郎と愛称される利根川は、時代とともにその姿を変えてきた。小田原攻めの直後の天正十八年(一五九〇)、徳川家康は関東の六ヶ国の領主に封ぜられた。家康は江戸を政治の本拠地として、関ヶ原の戦い後江戸幕府を開いたが、利根川の改修事業はこの時代から始まる。

上越国境の大水上山を源とする利根川の旧河道は、羽生市上川俣あたりで南に屈曲し、加須市の北を経て東南に流れ、今日古利根川と呼ばれる河川や、会の川・星川・元荒川・綾瀬川・入間川など多くの河川と離合しながら乱流し、隅田川を経て東京湾に注いでいた。この流れを『瀬替え』と呼ばれる大工事によって、浅間川や太日川(江戸川)と結び、更に赤堀川を開削して常陸川に結びつけ、銚子から鹿島灘に落とされた。いわゆる利根川の東遷である。(略)

利根本流は佐原から今の横利根川・常陸利根川【この2川が現在の茨城・千葉の県境になっている。】を経て銚子に抜けてい

た。佐原から真つ直ぐ銚子へ抜けるようになったのは幕末に近い頃である。今では霞ヶ浦は利根川の本流からは少し離れて、横利根川・常陸利根川を介して利根川の本流と結ばれている。しかし、いづれにしても利根川の洪水調節のための遊水池のような役目は持っているといえよう。

明治十九年(一八八六)お雇い外国人ムルデルが作成した利根川改修計画で、横利根川について、

『横利根川は利根川の一支にして、霞ヶ浦と名づくる大湖に通ずる所のものなり。低水の時はその水利根本流に向つて流れ、また海より満潮を来たし若しくは上流より高水を下し、以て河水の沸騰する時はその反対方向即ち霞ヶ浦に向きて流る。(「利根川百年史」)』

と記しているが、利根川の本流が洪水になると霞ヶ浦に逆流して被害を大きくした。霞ヶ浦に流入する流域の河川は二十九本であるが、流域には長大な河川があるわけではない。霞ヶ浦の西端に位置する土浦は、利根川や霞ヶ浦の影響を受けてしばしば水害に見舞われたが、土浦の洪水が『有史以来』のものではなく、江戸時代のある時期からというのはこのような理由もあつたからである。」

と述べられています。城下町が成立した江戸時代以降、土浦は数年に1回という頻度で水害を被つてきました。その原因は、「霞ヶ浦の逆水」と「桜川の氾濫」とによるものだったのです。

利根川筋には、1660(寛治3)年から1858(安政5)年までの約200年間に、18回の大洪水の記録があり、特に1783(天明3)年の浅間山大噴火の後に頻発しています。1786(天明6)年7月の大洪水では、土浦城下の水が1ヶ月も引かないため、江戸に詰めていた藩主土屋泰直は、土浦に帰れず、12月の参勤交代までの滞府(江戸在住)許可願を幕府に提出しています。洪水の頻発は、江戸時代から昭和まで続き、長島尉伸『土浦洪水記』、色川御蔭『防逆水私義』、色川三郎『家事志』、色川美年『家事記』などの

洪水記録が残されています。

明治に入っても、洪水が頻発しました。1873(明治6)年に開校した土浦小学校には、次のような記録が残されています。

「1885(明治18)年7月11日より2週間出水のため臨時休業。1890(明治23)年9月1日より15日まで出水のため臨時休業。1896(明治29)年9月14日より10月18日まで出水のため臨時休業。1897(明治30)年9月2日より16日間出水のため臨時休業。1898(明治31)年9月12日より19日まで出水のため臨時休業。1902(明治35)年9月29日より4日間出水のため臨時休業。」

1898(明治31)年の洪水については、『進修第1号』(1900(明治33)年1月15日発行)にも、次のような記事が掲載されています。

「臨時休業、第二学期は雨の中に来れり、霖雨霏々として黒雲慘憺たり、降りに降りたる水は遂に霞浦に溢れ、九月十三日に至りては、【土浦尋常高等小学校】校庭も早や一尺の深きに及び、途上は舟ならでは通るべくもあらねば、今は、とても授業し得ざればとて、十日間の臨時休校とはなりぬ【当時の土浦中学校では、内西町の土浦尋常高等小学校の新教室を借り受けて1年生3クラスを収容し、また内西町15番地の家屋を借り入れて職員室及び2年生の教室としていた。】」

色川三郎兵衛英俊
洪水禍に苦しむ土浦を救うべく尽力したのが、色川三郎兵衛英俊です。色川三郎兵衛(1842(天保13)年〜1905(明治38)年)は、千葉県の生まれで、1867(慶応3)年、土浦の醤油醸造業色川三郎の養嗣子となり、家督を受け継ぎました。維新後は政界に進出し、県議会議員を経て、1890(明治23)年の国会開設の際に、立憲改進黨から立候補し当選、衆議院議員を2期務めました。在任中、日本鉄道海岸線(現JR常磐線)の土浦〜田端間の敷設に際し、土浦町長の檜山信可と相談し、常磐線の盛土路盤に水防堤を兼ねさせて霞ヶ浦からの逆水を防ぎ、土浦を水禍から救うべく、路線変更を日本鉄道側に働きかけ、現在の路線を敷設

させました(当初は、土浦停車場を街の西端・現土浦二高付近に予定していた。現在の路線が花室川付近から東にカーブしているのは、霞ヶ浦海岸へ変更したからである。1896(明治29)年、土浦〜田端間開業)。



川口運動公園に建つ色川三郎兵衛之像

さらに、色川は、私財を投じて1906(明治39)年に川口川開門(注)と田町川開門とを完成させました。この開門の設置により、霞ヶ浦からの逆水はある程度は防ぐことができるようになりましたが、桜川の氾濫と大規模な水位上昇による市街地への湖水流入とは、防ぎきれませんでした。

(注)川口川開門 1907(明治40)年9月12日の尾崎楠馬先生(土浦中学校国漢科教諭。在職1907(明治40)年4月〜1911(明治44)年7月。校歌作曲者)の日記には、次のように記されている。

9月12日 木
放課後 直子二小田原(勇先生)ト川口ノ水害地ヲ二本ノ丸木橋約二丁ヲ傳ヒテ実見ス 艇庫式地【敷地】ハ猶一尺ノ水アリ後一週間ヲ経ズバ乾カズ 帰途開門辺ニ排除スル蒸気吸上仰筒【そくとう・ポンプ】ノ威力強大ナルヲ見テ帰り 小田原ノ寓【下宿先】ニ雑談、五分許 午睡シテ帰ル

参考・引用文献
『土浦の洪水記録』先人が語る水とのたたかい(土浦市立博物館)
『防災講座：地域災害環境』、『防災コラム』自然災害に備える(水谷武司)

前号に玉稿をお寄せくださった片岡稔恵様から、ご著書4冊『玄冬』ある疎開児童の物語、『残留・病死・不明』中国残留婦人たちは、今、『残留』、『明治が来た』、『流氓に非ず』中国残留婦人の物語』を本校図書館にご恵贈いただきました。深謝申し上げます。